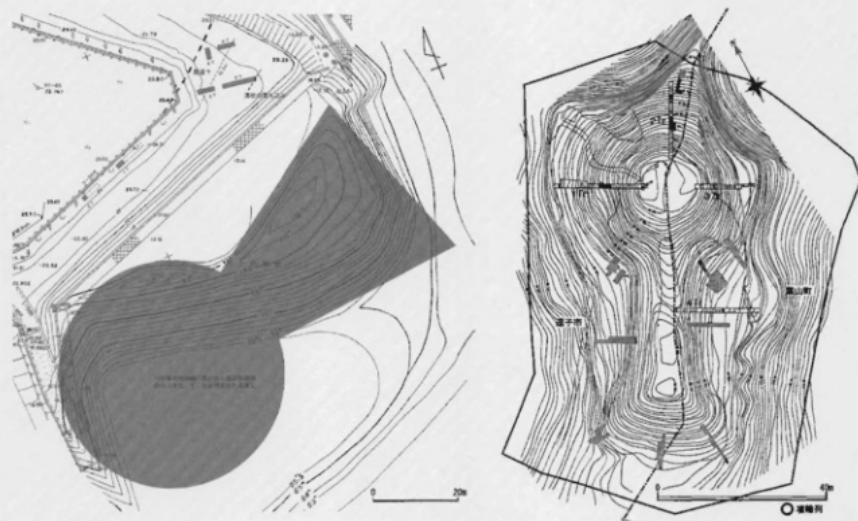


# 第31回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨

小特集：再発見 神奈川の古墳



2008年1月20日(日) 於：横浜市歴史博物館

主催 神奈川県考古学会

共催 (財) 横浜市ふるさと歴史財団

後援 神奈川県教育委員会・横浜市教育委員会・

鎌倉市教育委員会・小田原市教育委員会・

秦野市教育委員会

## 開催要項

開催日 2008年1月20日(日)

会場 横浜市歴史博物館 講堂

〔開会挨拶〕10:25~10:30 当会副会長 中村若枝  
<小特集：再発見 神奈川の古墳>

〔発表〕10:30~11:00 横浜市 観音松古墳 安藤広道氏

11:00~11:30 逗子市・葉山町 長柄桜山古墳群第1号墳  
山口正憲氏(\*発表者)・佐藤仁彦氏

11:30~12:00 横須賀市 大津古墳群 稲村繁氏

12:00~12:30 伊勢原市 日向・洗水遺跡 立花実氏

〔休憩〕12:30~13:30  
<調査・研究会場発表>

〔発表〕13:30~13:55 相模原市 津久井城跡(馬込地区) 島中俊明氏

13:55~14:20 秦野市 太岳院遺跡 近江屋成陽氏

14:20~14:45 海老名市 河原口坊中遺跡 宮井香氏

〔休憩〕14:45~15:05

〔発表〕15:05~15:30 小田原市 愛宕山遺跡第II地点 浅賀貴広氏

15:30~16:05 鎌倉市 今小路西遺跡 菊川英政氏

16:05~16:30 小田原市 大久保弥六郎邸跡第III地点 小山裕之氏

〔閉会挨拶〕16:30~16:35 当会会長 岡本孝之

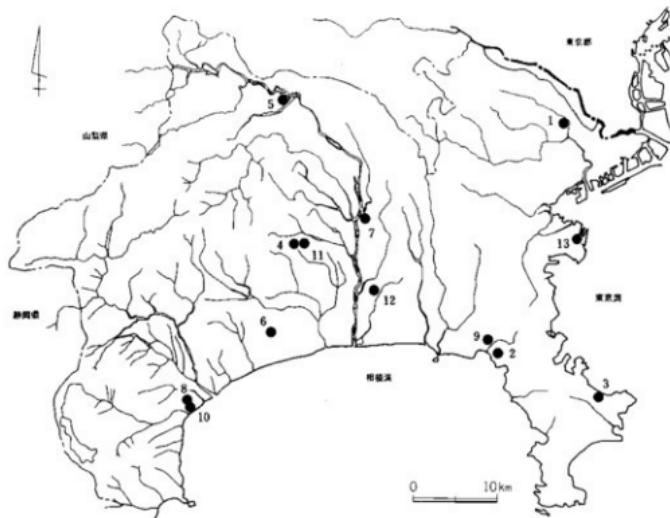
〔図書交換会〕10:25~15:05 横浜市歴史博物館

表紙：観音松古墳(左)と長柄桜山古墳第1号墳(右)  
(いずれも本文より)

裏表紙：日向・洗水遺跡出土鐸X線写真(本文より)

## 目 次

[小特集：再発見 神奈川の古墳]	
1. 横浜市 観音松古墳	1
2. 逗子市・葉山町 長柄桜山古墳群第1号墳	7
3. 横須賀市 大津古墳群	13
4. 伊勢原市 日向・洗水遺跡	19
[調査・研究会場発表]	
5. 相模原市 津久井城跡（馬込地区）	25
6. 秦野市 太岳院遺跡	29
7. 海老名市 河原口坊中遺跡	35
8. 小田原市 愛宕山遺跡第II地点	39
9. 鎌倉市 今小路西遺跡	43
10. 小田原市 大久保弥六郎邸跡第III地点	49
[調査・研究誌上発表]	
11. 厚木市 小野公所遺跡第3地点・A地区	57
12. 寒川町 岡田西河内遺跡	63
13. 横浜市（仮称）本町水屋敷遺跡	69



図中番号は上記目次頭の番号に一致

## 横浜市 観音松古墳

## —前期大型前方後円墳の外部施設の調査—

あんどう ひろみち  
安藤 広道

所 在 地 横浜市港北区日吉三丁目14

調査機関 慶應義塾大学民族学考古学研究室

調査担当 高山博・松原彰子・櫻井準也・安藤広道

調査原因 学術調査

調査期間 第1次調査:2006年3月11日～15日、

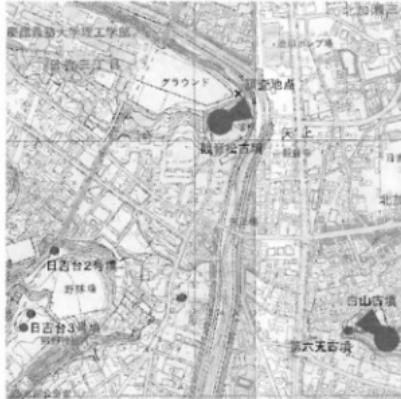
第2次調査:2006年8月16日～29日

調査面積 第1次調査:約11m<sup>2</sup>第2次調査:約11m<sup>2</sup>

## 1. 遺跡の立地

観音松古墳は、横浜市・川崎市の境を流れる矢上川が、鶴見川に向かって南に大きく流路を変える地点に南接した、矢上台と呼ばれる台地の東端に存在した古墳である。矢上台は、南北に鶴見川と多摩川の沖積低地を臨む、日吉一帯の広大な台地から、西に入り込む大きな谷戸によって切り離された、長さ約800m、幅100～200mの細長い独立した台地である。矢上台の東側延長線上には、500mほど離れて、同程度の大きさの独立台地である加瀬台が存在し、両者は、矢上川によって分断されたかたちになっている。

矢上台は、現在、慶應義塾大学矢上キャンパスによって地形が大きく改変されているが、キャンパス建設前の地形図によると、台地の西側は、標高約30mを最高点とする、緩やかな傾斜地になってしまっており、東側には、武藏野面に相当する、標高20m強の広い平坦面が存在していたらしい。観音松古墳は、この平坦面の東端に形成されていたことになる。



第1図 観音松古墳と調査地点の位置(1/10,000)

(国土地理院『武藏小杉』より)

矢上台を含む日吉一帯は、古くから弥生時代から古墳時代の遺跡が集中する地域として知られている。慶應義塾大学日吉キャンパスのある日吉台は、全体が弥生時代後期～古墳時代初頭の大規模な集落遺跡と考えられている。戦前より、その規模や大型住居址の存在などで注目を集めてきた遺跡であるが、昨年度の発掘調査でも、弥生時代終末～古墳時代初頭の床面積100m<sup>2</sup>に達する住居址が検出された。

一方、観音松古墳の南東500mの位置には、同じく前期の大型前方後円墳である加瀬白山古墳が存在した。また、北西約1kmには5世紀後葉の日吉矢上古墳が存在していた。ともにすでに破壊されているが、戦前の発掘調査によって豊富な副葬品が出土したことで知られた古墳である。そのほか、日吉台、加瀬台には、第六天古墳をはじめと

する、6～7世紀のものと推測される小円墳が多数分布し、さらに一帯の台地斜面には、おびただしい数の横穴墓が構築されているものと考えられる。

日吉台・矢上台一帯は、弥生時代後期の大規模集落から、古墳時代前期の大型前方後円墳の形成、さらに、以後、終末期に至る古墳の変化を検討することのできる、考古学的にきわめて重要な地域と評価できよう。

## 2. 調査に至る経緯と調査経過

観音松古墳は、古くから南関東地方の代表的な前期前方後円墳の一つとされながら、実態の不明な古墳であった。墳丘は、1938年の土取りにより破壊されており、それ以前の写真や図面等は残されていない。また、その際に行われた発掘では、中央粘土櫛と西粘土櫛とされるふたつの主体部が検出され、比較的豊富な遺物が出土しているものの、これらの記録や出土遺物の報告も行われてこなかった。そのため、観音松古墳をめぐっては、墳丘の規模や主軸方向、更に時期についても、研究者ごとに評価が異なるという状況が続いている。

一方、観音松古墳を含む日吉・矢上キャンパス内の遺跡については、最近まで、すでに破壊されているものと考えられていた。しかし、ここ数年の表面採集等の調査によって、遺跡がまだ広くキャンパス内に残っていることが明らかになってきた。そこで、民族学考古学研究室では、遺跡を大学の研究・教育の資源として活用することを目指し、その遺存状態を確かめるための発掘調査を実施することにした。その第一弾が今回の調査というわけである。

今回の調査地点を選んだ理由は、以下のとおりである。

観音松古墳が破壊される前の、1909年測量の2



第2図 1909年の観音松古墳(1/10,000)

万分の1地形図には、観音松古墳の後円部と考えられる円形の等高線が描かれている。この円形の等高線から北東に向いて、針葉樹の記号が付された台形のエリアがあり、両者を結びつけると前方後円墳の形となる。この主軸方向は、『横浜市史』をはじめとする、これまでの文献では示されたことのないものであったが、仮に、観音松古墳の主軸方向が、地形図からの推測どおりだとすると、現在の矢上キャンパスのグラウンド東端に、周壕等の外部施設が残存している可能性が考えられる。

そこで、矢上キャンパス内の遺跡の遺存状態を確認でき、かつ観音松古墳の主軸方向や墳丘規模に関わる新たな情報が得られる期待の大きい、今回の調査地点を発掘することにしたわけである。

発掘調査は、2006年3月と8月の二回に分けて行った。第1次調査では、地形図から推測される観音松古墳の大まかな墳形と主軸方向を踏まえ、グラウンド東辺部の外側に、2ヶ所のトレンチ(1T、2T)を設定した。しかし、両トレンチが厚い盛土の上に位置することが明らかになったため、グラウンドから4mほど下がった、標高21m前後のテラスに、新たに4m×1mの2ヶ所のトレン

チ（3 T、4 T）を設定した。その結果、テラス部分に、古墳時代に遡る可能性のある大規模な落ち込みが存在することが明らかになった。

第二次調査は、この落ち込みの性格を明らかにするために実施したものである。3 T の東側の延長線上に 8 m × 1 m のトレンチ（5 T）、4 T の西に 3 m × 1 m のトレンチ（6 T）を設定し、落ち込みの範囲の把握を試みた。

### 3. 調査の概要

先述のとおり、1 次調査で掘削した 4 本のトレンチのうち、1 T・2 T では、コンクリート等を含む厚い盛り土が確認された。この盛土は、一部 3 T にも及んでおり、少なくとも矢上キャンバスのグラウンドの東側は、4 m に及ぶ盛土で平坦面を形成していることが判明した。つまり、グラウンドの盛土の下には、まだ埋蔵文化財が良好な状態で残っていることになる。

一方、3 T と 4 T で確認された大規模な落ち込みは、3 T において地表面より 2 m 以上、武藏野台地 VI 層に相当すると考えられる層まで掘削されており、比較的均質な厚い黒褐色土によって埋まっていた。台地の縁辺に近い 4 T では、黒褐色土層の下にソフトローム層が残っていたが、こちらでは、掘削された底面が東側に向かって傾斜する様子が捉えられた。

両トレンチの黒褐色土層からは、弥生土器・土師器の細片が出土し、なかには比較的大型の破片も存在する。こうした出土遺物や覆土の特徴から、この落ち込みを、古墳時代前期以降、古代以前に掘削されたものと判断した。

続く第 2 次調査では、この落ち込みの範囲を確認するため、3 T、4 T の延長線上に 5 T と 6 T を設定した。ともに落ち込みの立ち上がりの検出を期待したものだが、盛土・表土下より、同じ黒褐色土層が検出され、両トレンチとともに、落ち込

みの範囲内にあることが判明した。5 T では、地表下 2.6 m の位置で、ようやく底面のローム層が確認され、さらに東端において、この底面をさらに掘り込む溝状の落ち込みの肩が検出された。

2 度の調査の結果、テラス部分に存在する落ち込みは、南西—北東方向に走る、幅 20 m 以上、深さ 3 m 近い大規模な壕状を呈する遺構である可能性が高くなった。また、この遺構は、その位置や規模、形態、時期等からみて、観音松古墳に伴う周壕、あるいは掘り割りのようなものであると考えてよさそうである。とすれば、観音松古墳は、1909 年の地形図どおり、前方部を北東に向けた前方後円墳であり、前方部の端部が台地の北縁にまで達していたことになる。

### 4. 校地地図・主体部出土遺物の調査成果

我々は、今回の発掘調査とは別に、慶應義塾に保管されている古い校地地図の調査、及び 1938 年に主体部から出土した遺物の調査も行っている。これらの調査は、現在も継続中であるが、ここで、今までに判明したことを報告しておきたい。

校地地図の調査では、今のところ観音松古墳が破壊される前のものは発見されていない。しかし、第 2 次調査後に、墳丘削平の 3 年後にあたる 1941 年測量の矢上台地の詳細な地形図を発見することができ、そこに観音松古墳の前方部と後円部の残骸が記録されているのを確認した。この地図が測量された時点で、墳丘の 80% 程度が削り取られているものの、前方部の北コーナーからクビレ部、後円部の輪郭の一部が残存しており、そこから観音松古墳の墳丘の規模、形態、主軸方向等が、ある程度復元可能になった。

この地形図によると、観音松古墳は前方部を北東に向けた、墳丘長 90 m ~ 100 m、後円部径 50 ~ 60 m、前方部長 40 ~ 50 m の前方後円墳に復元できる。クビレ部の角度からは、いわゆる柄鏡型では

なく、前方部の開く墳形だったことがわかる。残存部の高さは、前方部が4m、後円部は3mであり、ともに、本来はこれらの数値以上の高さを有していたと想定できる。ただし、1909年の2万分の1地形図では、5mごとの等高線が描かれながら、前方部には等高線がみられないため、この時点で5mを大きく超える高さを有していたとは考えにくい。一方、後円部は1909年の地形図に、比較的大きな円形のコンタが認められることから、前方部に比して高くなっていたことは間違いない。前期の前方後円墳に特徴的な前方部が低い墳形であったと考えてよさそうである。

さて、上記の地形図から復元された墳丘を、現在の地形図と重ね合わせてみると、発掘によって確認された壇状遺構の方向、底面のコンタライン、底面から掘り込まれた構造の落ち込みの肩の方向が、前方部北西辺の墳裾のラインと一致することが判明した。この結果から、我々の確認した壇状遺構が、観音松古墳の周壇である可能性が益々高まったと考えられる。なお、1941年の地形図の前方部のラインを墳裾とすると、周壇は幅30m前後に達する大規模なものとなる。あたかも台地の先端を掘り割るように大規模な壇を掘削することで、墳丘の盛土を確保するとともに、視覚的に墳丘を高く見せるという効果を狙ったものと解釈できよう。

一方、主体部出土遺物の調査では、ラベル等の検討によって、中央粘土櫛と西粘土櫛の出土遺物を、ある程度分けることが可能になった。

中央粘土櫛からは、大型の船載内行花文鏡をはじめ、銅鏡や各種玉類が出土していたことが判明し、主体部が粘土櫛であること、そして副葬品に長大化した銅鏡や滑石製の勾玉・管玉が含まれることから、前期でも末葉に近い時期に構築されたものと考えることができる。加瀬白山古墳の中央木炭櫛出土遺物より、新しい様相をもつことは間

違いない。

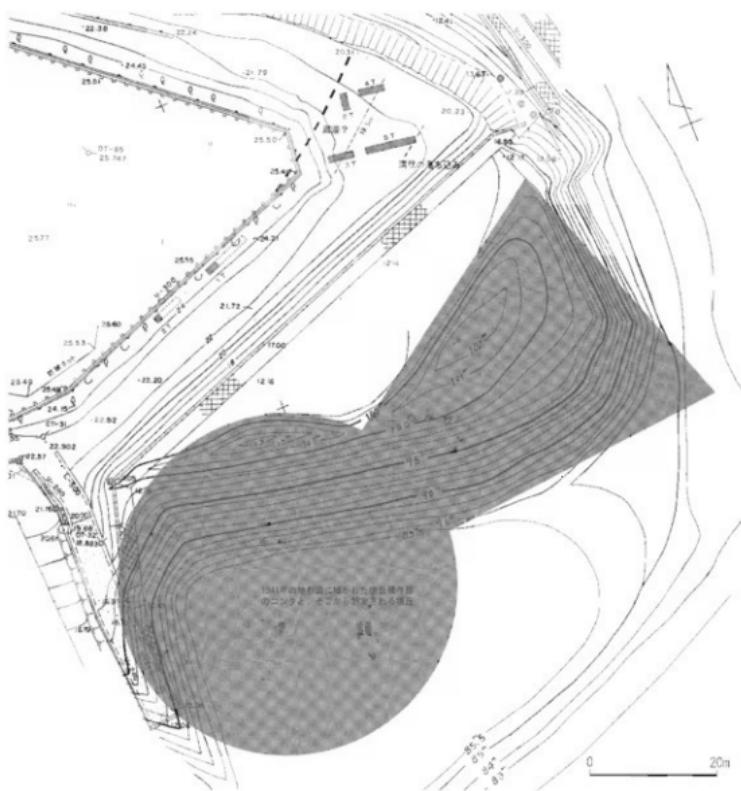
主体部出土遺物から推定される時期は、今回校地地図から推測された前方部が開く墳形や、発掘の結果から想定された幅の広い壇の存在とも整合するものと考えられる。

## 5.まとめ

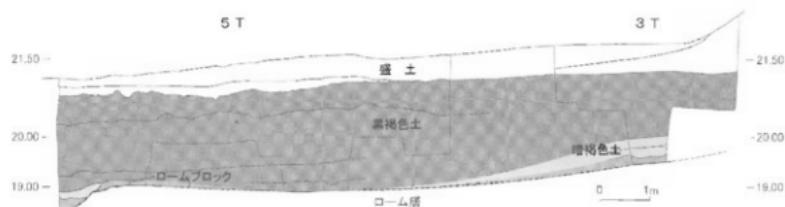
今回報告した発掘調査をはじめとする一連の調査によって、前期の大型前方後円墳であったという以外、不明な点が多くあった観音松古墳に関する、墳丘の形態や規模、主軸方向、周壇のあり方、時期など、予想を超える新知見を得ることができた。

近年、神奈川県内では、逗子市長柄桜山古墳、海老名市秋葉山古墳群、厚木市ホウダイヤマ古墳など、前期前方後円墳の発掘調査が続いている。こうした新たな調査成果をもとに、神奈川県のみならず東日本における前期古墳の出現と展開をめぐる議論も活発化しつつあるようである。今回、観音松古墳の規模や形態、時期等についての解明が進んだことは、神奈川県内および東日本全体の古墳時代研究においても、きわめて重要な意味をもつことは間違いない。

なお、観音松古墳をめぐる新知見の詳細、およびそれらを踏まえた考察については、正式報告の中で詳しく論じていくつもりである。



第3図 調査区および觀音松古墳墳丘の想定



第4図 3T・5T南壁セクション



写真1 第2次調査全景



写真2 第5トレンチ全景

## 逗子市・葉山町 史跡長柄桜山古墳群第1号墳

## —史跡整備に伴う発掘調査—

山口 正憲・佐藤 仁彦

所在 地	逗子市桜山七丁目 1839番2他 葉山町長柄字芳ヶ久保 691番5他
調査機関	逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
調査担当	佐藤仁彦・山口正憲
調査原因	学術調査(国庫・県費補助事業)
調査期間	平成18年8月21日～10月27日
調査面積	32.5 m <sup>2</sup>

## 1. 遺跡の立地

史跡長柄桜山古墳群は、三浦半島の付け根付近西側の、相模湾を望む桜山丘陵の尾根線上に立地する。古墳群は2基の前方後円墳(東側:第1号墳、西側:第2号墳)によって構成され、両古墳間の距離は約500mである。両古墳とも、逗子市と葉山町の行政界線上に位置する(第1図)。

## 2. 調査に至る経緯と調査経過

当該古墳群は、平成11年3月、第1号墳後円部頂で、携帯電話の中継基地建設工事に伴う小規模な森林の伐採が行われた際、葉山町在住の東家洋之助さんが埴輪片等を発見したこと、その存在が明らかになった。発見後に行われた試掘調査、測量調査、範囲確認調査の結果、第1号墳が墳長90m、後円部径51m、第2号墳が墳長88m、後円部径54mの前方後円墳であり、現存する古墳としては県内最大級の規模を有することが明らかとなり、平成14年12月19日に国史跡指定を受けた。

逗子市と葉山町は、史跡の恒久的な保存・整備を図るため、今後の整備に必要な地下遺構の情報収集を目的とした発掘調査を実施することとし、平成18年度から第1号墳の調査に着手することとなった。



第1図 史跡長柄桜山古墳群の位置(1/10,000)

### 3. 調査の概要

第1号墳は、東西にのびる丘陵上のピークの一つに後円部を設け、前方部を南西に向けている。現状では墳丘西侧斜面部は本来の形状を比較的よく残しているように観察されるが、一方後円部北側から墳丘東側斜面部は等高線が乱れており、人为的・自然的改変を受けているように思われた。

発掘調査は、調査目的の達成が可能な範囲で必要最小限の掘削に留めることを前提とし、トレンチ調査により行うこととした。平成18年度は墳丘の平面形態のほか、段築の有無など立面形態を明らかにするために、後円部に3箇所、前方部に1箇所のトレンチを設定して調査を行った。

#### 後円部の調査

後円部には墳丘主軸に沿った北側斜面に1カ所(2トレンチ)、主軸に直交する中軸線上に沿って2カ所(1、3トレンチ)にトレンチを設定した。

調査の結果、墳丘は地山の土丹(三浦層群逗子層シルト岩)を削り出し、その上に土丹と黒褐色土の混ざった盛土を施していることが確認された。また2トレンチでは土丹と盛土の間に旧表土にあたる黒色土層の堆積を確認している。

立面形態は、北側～西側斜面部(1、2トレンチ)では20度程度の比較的緩やかな勾配をもって立ち上がっており、1トレンチでは標高123.5m付近で幅約2.5mの緩傾斜の平坦面を1カ所確認している。2トレンチでは標高123.5m付近で幅3mほど、標高約121.5m付近で幅1mほどの緩傾斜の平坦面を2カ所確認した。これらの平坦面上には埴輪片を比較的多く含む黒色土の堆積が認められたため、後世の改変等によるものではなく段築テラスであると判断した。なかでも2トレンチ中段テラスでは多数の埴輪片がまとまって出土しており、形状がよく分かる壺形ないしは朝顔形埴輪の口頭部や円筒埴輪が確認されたものの、テラス上に樹立されていた様子は窺えず、墳丘構築後

の比較的早い段階で墳頂部から流入したものと判断した。

墳裾は1トレンチの標高119.4m付近で墳丘面からの傾斜変換が確認され、墳裾と判断した。

また、現状で等高線の乱れが認められる後円部東側斜面部(3トレンチ)では、30度程度の勾配をもつ墳丘斜面部から、標高122m付近で緩やかな平坦面が形成され、そこから比高差11mほどの落差をもつ急斜面に至る状況が確認されている。この平坦面上からは1、2トレンチと同様埴輪片を含む黒色土の堆積を確認している。崩落を示すような明確な所見は得られなかったことから、元来不整な形状をなす墳丘構造であった可能性が想定されるが、3トレンチで確認した平坦面は1、2トレンチで確認された段築テラス、墳裾とは高低差があるため、いずれに相当するのかは確定できなかった。

また、墳頂部平坦面の縁辺では、1トレンチで2個体、3トレンチで1個体、1トレンチと2トレンチの間で1個体分の埴輪基部を確認した。埴輪の基部径は概ね40cmほどに復元できるものと思われ、並んで発見された1トレンチの2個体の埴輪基部の間隔は約10cmを測る。これらは後円部墳頂部縁辺に樹立された埴輪列の一部と考えられる。

#### 前方部の調査

前方部には、墳丘主軸に直交した東側斜面(4トレンチ)にトレンチを設定した。墳丘は後円部同様、地山の土丹を削り出してつくられており、墳頂部付近では旧表土に相当する黒色土の堆積を確認している。なお前方部では盛土は確認できなかった。墳丘斜面部には標高121m付近で幅2m程度の平坦面を1カ所確認しており、段築テラスの可能性が考えられるが、表土層直下で墳丘地山が確認されており、後世に改変を受けている可能性も考慮される。墳裾は現況地形の傾斜変換線より

も外側で確認されているが、これは範囲確認調査の結果とも整合するため、測量図から受ける印象よりも幅広の前方部となる。

なお、墳裾から東には平坦面を削りだしており、この平坦面東端の崖面付近で地割れと思われる痕跡が確認されている。

#### 4. 所 見

第1号墳については、かながわ考古学財団の調査等により、これまでに①墳長90mの前方後円墳であること、②墳裾付近は地山を削り出していること、③川西編年2期とされる円筒埴輪と壺形埴輪を伴うことなどが分かっていたが、今回の調査により、さらに次のようなことが明らかとなった。

第一には、墳丘は基本的に地山削り出しによるものであるが、少なくとも後円部にはその上に盛土が施されている点である。

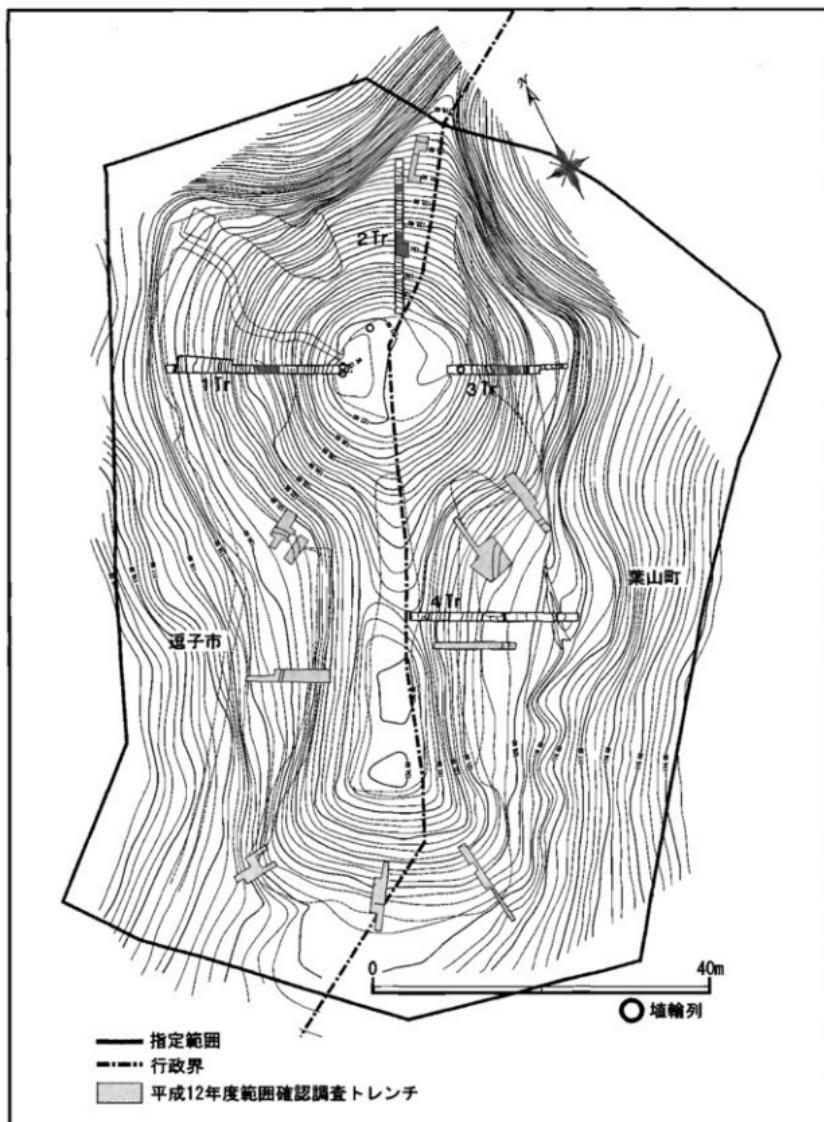
第二に、墳丘構築にあたっては自然地形を最大限利用した可能性が高い。このことを端的に示すのは、後円部北側～西側斜面部（1、2トレーナー）と後円部東側斜面部（3トレーナー）の墳丘斜面の傾斜角度が大きく異なるということである。崩落等により地形変更を受けている可能性を完全に否定するまでには至っていないが、調査所見から後円部墳丘は左右対称の形状をなしていなかったものと考えられる。

第三に、墳丘構築にあたっては段築が採用されている点である。後円部では1トレーナーで中段テラスが、2トレーナーで下段テラスと中段テラスが確認されている。1トレーナーでは下段テラスは明確ではなかったが、表土層直下で土丹の地山に達しているため、後世の改変を受けている可能性もある。また3トレーナーでも平坦面が確認されているが、1、2トレーナーで確認された段築テラス、墳裾とは高低差があり、現状では対応しないため、これらがどのように接続するのかは今後の課題である。

ある。前方部でも墳裾とは別に平坦面が確認されているが、やはり表土層直下で地山の土丹が確認される状況であり、埴丘構築当初のものは判然としない。したがって現時点では、後円部で二、ないし三段の段築の存在の可能性を指摘することができる。

第四に、後円部墳頂部平坦面の縁辺に埴輪列が確認されたことである。埴輪列はその基部が残存するのみであったが、少なくとも後円部墳頂部平坦面を巡っていた可能性が高い。なお、段築テラスでは、多くの埴輪が出土したもの、いずれも埴頂部から流れ込んだ状況を呈しており、樹立されていたと考えられるものはなかった。長柄桜山古墳群ではこれまでに円筒埴輪と壺形埴輪が確認されているが、埴輪列で確認された基部は外面が肥厚し、やや内傾しながら立ち上がるるもので、現在のところ類例は明らかではない。

長柄桜山古墳群については、引き続き発掘調査を進めていく、史跡の保存整備に必要な情報収集に努めていく予定であり、本調査はその一部である。したがって、平面形態や段築を含む立面形態の詳細については、今後の調査結果をまってから評価していく必要があるものの、今回の調査は埴輪列や段築の存在など、これまで知られていなかつた多くの特筆すべき成果を得ることができたといえよう。



第2図 長柄桜山古墳群第1号墳調査区配置図



写真1 後円部墳頂部埴輪列出土状況（1トレンチ）



写真2 後円部中段テラス出土状況（2トレンチ）



写真3 後円部東側調査区埴輪出土状況（3トレンチ）

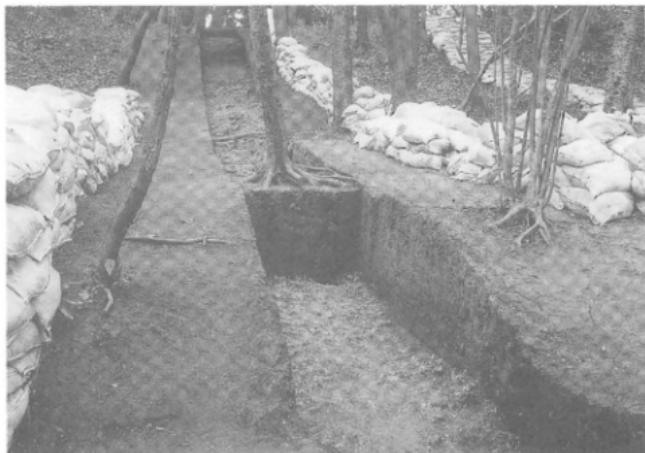


写真4 前方部東側調査区完掘状況（4トレンチ）

## 横須賀市 大津古墳群

—埴輪を伴い、横穴式石室を主体部とする前方後円墳—

いなむら 稲村 繁

所 在 地	横須賀市大津町 2-64・3-53 他
調査機関	横須賀市史編さん考古部会資料調査会
	横須賀市自然・人文博物館
調査担当	第1次：稲村 繁 第2次：稲村 繁・佐藤仁彦
調査原因	市史編さん事業に伴う学術調査
調査期間	第1次：2007年3月1日～3月20日 第2次：2007年9月24日～11月7日
調査面積	第1次：約25m <sup>2</sup> 第2次：約60m <sup>2</sup>

## 1. 遺跡の立地

三浦半島の中程、東京湾に突出した小原台の西側には、半島北部で唯一の砂堆と遠浅の海岸線が東西に長く続いている。さらに、この海岸線に向かい幾筋もの急峻な尾根が南から北に伸びており、本古墳群はこれら尾根群の西端に位置し、最も東京湾に突出した尾根上に築造されている。また、本古墳群の西方には沖積低地が広がっており、最奥部は半島最大河川の平作川にまで達している。

急峻な地形が広がっていることから、周辺に遺跡は少ない。同時代の遺跡としては同じ尾根の奥西側斜面に構築されていた信楽寺横穴墓群、東側に並行して伸びる尾根の東斜面に構築されている貞昌寺横穴墓群、さらに東方の尾根東斜面の東谷横穴墓群など墓が多い。唯一生活址と考えられるのは本古墳群の東方約1.5kmに位置する中馬堀遺跡であり、古墳時代後期から近世にかけての当該



第1図 大津古墳群位置図

地域最大の複合遺跡である。このほか、古墳群背部の丘陵上には縄文時代の銭ヶ原遺跡・近世の向井将監夫婦墓などもある。

## 2. 調査に至る経緯と調査経過

当該地については以前から複数の研究者が古墳の存在を指摘していたが、民有地の山林であったことから確認できない状況であった。近年、横須賀市によって公有地化されたことから2006年12月に立ち入り調査を実施したところ、墳丘状の高まりが3カ所で確認された。

この結果を受け、横須賀市史編さん考古部会では確認調査を実施することにした。

調査は市史編さん考古資料調査会(代表矢島國

雄)が横須賀市自然・人文博物館と共同でおこない、2007年春の第1次調査では全体の地形測量と、前方後円墳の可能性が高い1号墳について部分的なトレンチ調査を実施した。また、2007年秋の第2次調査では、1号墳の埋葬施設の構造解明・墳丘規模の確定・築造時期推定のための共伴遺物検出、3号墳では墳頂部の板碑関連施設の確認・埋葬施設の確認など補足的な調査を実施した。

### 3. 調査の概要

調査の結果、帆立貝形前方後円墳1基・円墳2基で構成される古墳群であることが確認された。いずれも自然地形を最大限に活用しており、現状で周溝は確認できない。

#### 1号墳

古墳群中最も低い尾根先端に築造されており、前方部の短い帆立貝形を呈する前方後円墳である。主軸はほぼ東西方向で、前方部西側には尾根を切断した区画溝が確認されている。全長約23m・後円部直径約16m・同最大高3m・前方部長7mを測る。墳頂部には盛り土が認められるが、墳丘の大半は地山削り出しで整形している。

埋葬施設は南南西に開口する全長約5mの右片袖横穴式石室と推定される。石室の掘り方内には埋め戻し時に多量の礫石が投げ込まれていることから、石室は礫石を用いた自然石積みである可能性が高い。

共伴遺物としては墳丘裾部を中心に埴輪が検出されている。原位置をとどめるものは確認されなかったが、円筒埴輪のほか墳頂部東端で家形埴輪、南側くびれ部で馬形埴輪も出土している。さらに、くびれ部を中心として須恵器壺片・提瓶、土師器有段杯・比企型環片も出土している。これらの出土遺物から、1号墳は6世紀後半の築造と考えられる。

#### 2号墳

1号墳と3号墳の間に築造されており、現状では円墳と考えられる。墳丘の西側に尾根を大きく削り取った痕跡が認められる。発掘調査は実施していないため詳細は不明であるが、直径約15m×14m・東側での高さ約2.6mを測る。

#### 3号墳

古墳群の西端に位置し、尾根の最高所に築造されている。現状では円墳と考えられる。直径約20m・東側での高さ約3.8mを測る。

墳頂部に設定したトレンチ内からは、墳丘盛り土途中の祭祀に伴うと考えられる直刀1振・鉄鎌約30本が検出されている。鉄鎌の特徴などからみて、6世紀末～7世紀初頭頃の築造と考えられる。

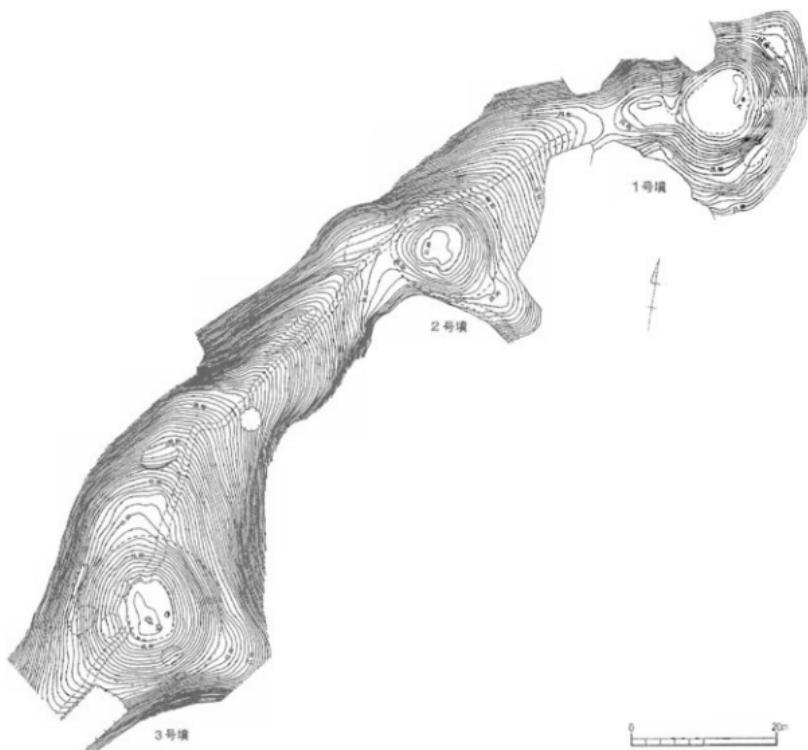
なお、室町期と推定される墳頂部の板碑については、わずかな盛り土のあと自然石を配しているが、地下に埋納物は確認されなかった。

### 4.まとめ

今回の調査によって、三浦半島北部東京湾岸ではじめて古墳の存在が確認された。

出土遺物の年代からみて1号墳→3号墳の順で築造されたものと考えられる。また、2号墳については未調査のため詳細は不明であるが、占地・墳丘規模などからみて3号墳以後の築造の可能性が高い。したがって、本古墳群は6世紀後半から7世紀前半の間、最初に尾根先端の埴輪を伴い右片袖横穴式石室を主体部とする帆立貝形前方後円墳の1号墳が築造され、次いで尾根最高所に3号墳、最後に1号墳と3号墳の間に規模を縮小した2号墳が築造されたと推定される。同じ尾根に位置する信楽寺横穴墓群のなかで金銅製精飾り金具を出土した1号穴が7世紀前半の築造とされることから、この時期に当該地域では首長墓が高塚墳から横穴墓へと変化したとも考えられる。

1号墳についてみると、半島の東京湾側ではじ

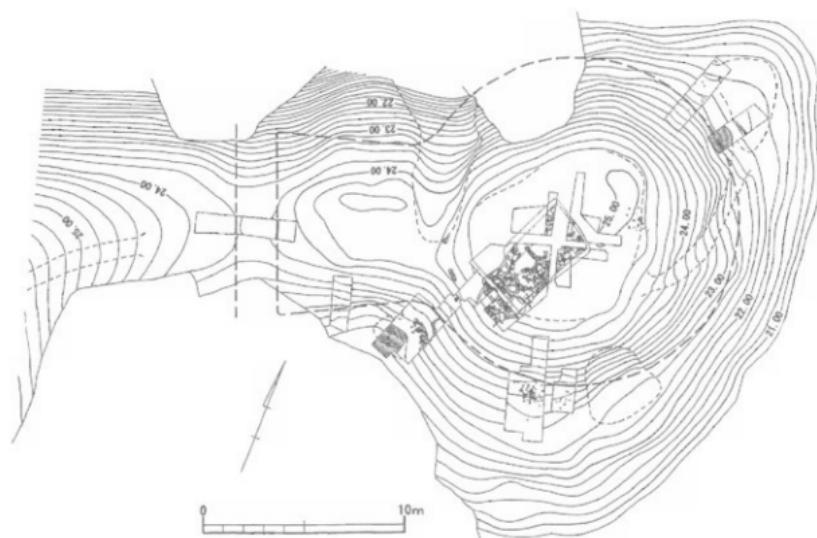


第2図 古墳群測量図

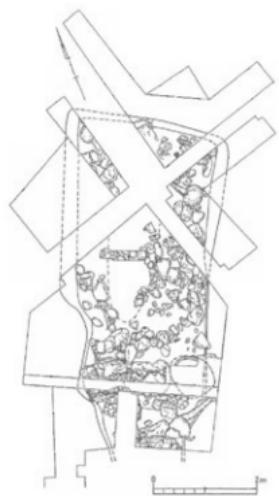
めて確認された横穴式石室である。築造時期や埴輪を伴うことなどからみて神奈川県内でも導入期に位置づけられよう。また、自然石積みで片袖となるのは相模地域に共通しているらしく、武藏地域の切石積み無袖とは対照的である。ただし、半島の東京湾岸では後続する横穴式石室がみられないことから、單発的に出現した可能性もある。埴輪については、出土状況などから後円部埴頂にのみ開縫していたと考えられる。また、円筒が小形に製作されていることから遠方より運ばれてきた可能性が高いが、その製作地については埼玉県西部～群馬県が想定される。これについては、

石室の構造や出土している土師器坏類にも共通した様相がみられる。

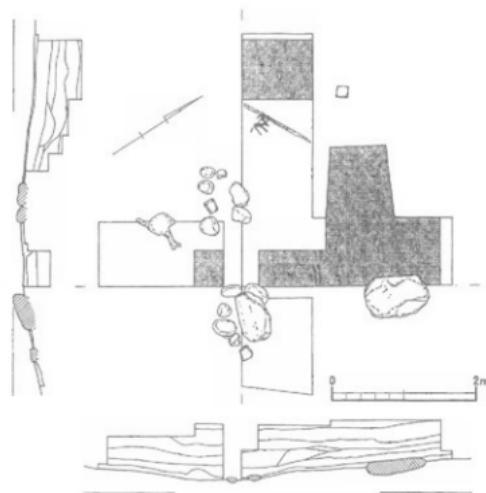
以上のようないくつかの特徴を考え合わせると、被葬者は在地の首長ではなかった可能性も考慮しなければならないであろう。



第3図 1号墳実測図



第4図 1号墳石室平面図



第5図 3号墳墳頂部調査区図



写真1 古墳群遠景(南より：尾根先端が1号墳・最高所が3号墳)



写真2 1号墳全景(西より)



写真3 1号墳前方部前面区画溝



写真4 1号墳後円部南側トレンチ



写真5 1号墳南側くびれ部



写真6 1号墳主体部(南より)

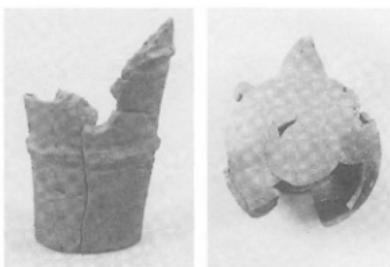


写真7 1号墳出土遺物(左埴輪・右須恵器)



写真8 2号墳全景(西より)



写真9 3号墳全景(北東より)



写真10 3号墳墳頂部(北より)



写真11 3号墳墳頂部遺物出土状況

伊勢原市 ひなた あろうぎ  
日向・洗水遺跡

—古墳時代後期の横穴式石室と銀象嵌の大刀—

立花 実

所在地	伊勢原市日向字洗水840番地外
調査機関	伊勢原市教育委員会
調査担当	立花 実・井出智之
調査原因	開墾、花壇造園
調査期間	第1次 平成18年7月5日～8月8日 第2次 平成19年3月5日～3月23日
調査面積	約150 m <sup>2</sup>

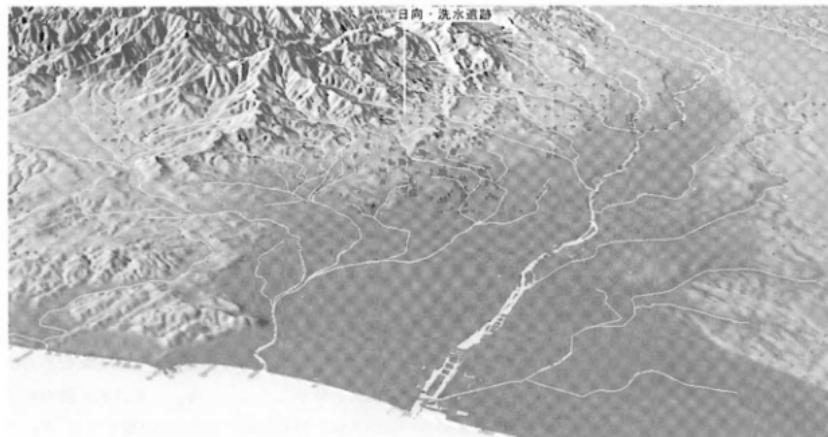
## 1. 遺跡の立地

日向・洗水遺跡の所在する伊勢原市は、神奈川県の中央を南流する相模川の右岸（西岸）に位置する。市域全体は、県北西部にそびえる丹沢山地から南東へ傾斜するが、そのなかで山地、丘陵、台地、谷戸、低地と多様な地形条件を見ることができる。

調査地である伊勢原市日向字洗水840番地は、厚木市との境界に近い伊勢原市の北部に位置する（第1図）。日向川の右岸に広がる平坦地と丹沢山地から連なる丘陵地形が接する地域である。微視的には長後山の東側斜面にあたり、東側に広がる水田面からは2～5m程高い山裾部分である。標高は105m、現状は果樹や畠地となっている。

## 2. 調査に至る経緯と調査経過

調査の発端は、平成18年6月にあった土地所有者からの電話が始まる。荒地を開拓していたところ、石と刀が出てきたという通報に、すぐに現地へ駆けつけると、直刀二振りと露出している大きな石を確認した。過去の周辺の調査状況からも、古墳時代後期の横穴式石室であると推定した。市教育委員会では、緊急に調査を実施する必要があ



第1図 日向・洗水遺跡の位置

ると判断し、土地所有者に協力を要請した。そして協議の結果、開墾、耕作の時期をずらし、直ちに調査を開始することで合意に達した。

調査は平成18年7月5日から同年8月8日までに第1次調査を行い、石室の保存についての協議を経て、翌年3月5日～同年3月23日に埋め戻しを含む第2次調査を実施した。

### 3. 調査概要

今回の調査で発見された遺構は横穴式石室1基である。

発見当時は、無数の大きな石が広い範囲に散乱しており、石室本体の位置は確定できない状況であった（写真1）。そこで、直刀が出土した箇所を中心に石の輪郭を出す作業を繰り返したところ、石の範囲はそこから東側、北側に広く続いている。調査区を広げて石の範囲を追うこととした。北側部分では、耕作土や二次的に掘り返されている土の中に石が埋没しており、地山やしっかりした版築層を確認することはできなかった。一方、西側と南側では地山を確認することができ、人為的に据えられた石室の一部と考える石をとらえることができた。この段階で石室は山を背負い西に奥壁、東に開口することが判明した。そして、北側に広く散乱する石は石室を崩した痕跡であると考えられた。恐らく、石室北側の地面に穴を掘り、石室を崩しながら石を埋めたものと推定される。事実、石室の上部は大きく失われ、残されていたのは石室の最下段の石のみであった。奥壁及び石室奥側の両側壁も現存しなかったが、玄室の礫床はかろうじて残されていた（写真2・4）。

推定される玄室の幅は奥壁際で最大1.6m、羨門部分で最小1m、奥が広く入口が狭い櫛形となる。側壁はほぼ直線に並ぶようである。玄室の長さは5.4m、礫床には20～30cmの比較的大振りな川原石を用いている。それは奥壁側がやや大振り

で羨門に近くなるにつれ小振りとなる。礫床の石はほぼ平坦に整えられた地山に直接置かれており、掘り方は存在しなかった。

側壁は50～60cm、高さ20～30cmの方形の石を使用している。基本的に小口積みとなっているが、一部に横長に使っている部分も見られる。側壁の石は礫床よりもやや深い位置に据えられており、若干掘り窪められた中に設置されている。側壁の外側には控え積み（裏込め）の石が見られるが、その範囲は幅約1mとなる。つまり、控え積みを含めた石室の幅は約4mである。

羨門には約2mに渡って閉塞石が積み重ねられていた。長さ20～30cmの石を縦方向に積んだものである。その下部には玄室との境界となる長さ80cm程の長円形の石が据えられていた。地山床は羨門に向かって緩く傾斜し、羨門部から弱い段を造りながら前庭部へと下がっていく（写真3）。

前庭部の両側には30cm前後の石が2～3段重ねられており、北側の石積みは現存していないが、恐らく周溝から羨門に真っすぐにつながる通路状の空間となっていたと考えられる。その幅は1.1～1.4mである。ただし、この前庭部を取り囲む石積みは前庭部の床面よりやや高い位置から積み始められており、築造当初から付属していたものではなく、後に加えられた可能性もある。調査した範囲での前庭部から奥壁控え積みの石までの長さは約10mとなる。

遺物は先に出土した直刀二振の他、玄室内から鉄製品と玉類が出土した（第3図）。鉄鏃は長頭の片刃と比較的短い三角形、五角形鏃が混在しており、時期差を有する可能性がある。また、刀子が2点、木製弓の弓筈付近に装着される飾り金具、さらに革帯の先端につくと考えられる鈎留めの飾り金具が数点出土している。玉類は水晶製の切子玉が1個と滑石製の白玉が20数個である。それぞれの出土地点は鉄鏃、玉類にはまとまりがみられ



写真1 調査開始直後の様子



写真2 横穴式石室全景（閉塞）

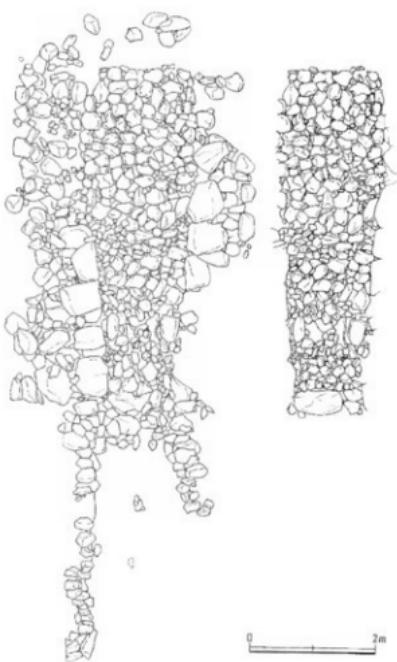
第2図 横穴式石室平面図 ( $S=1/80$ )

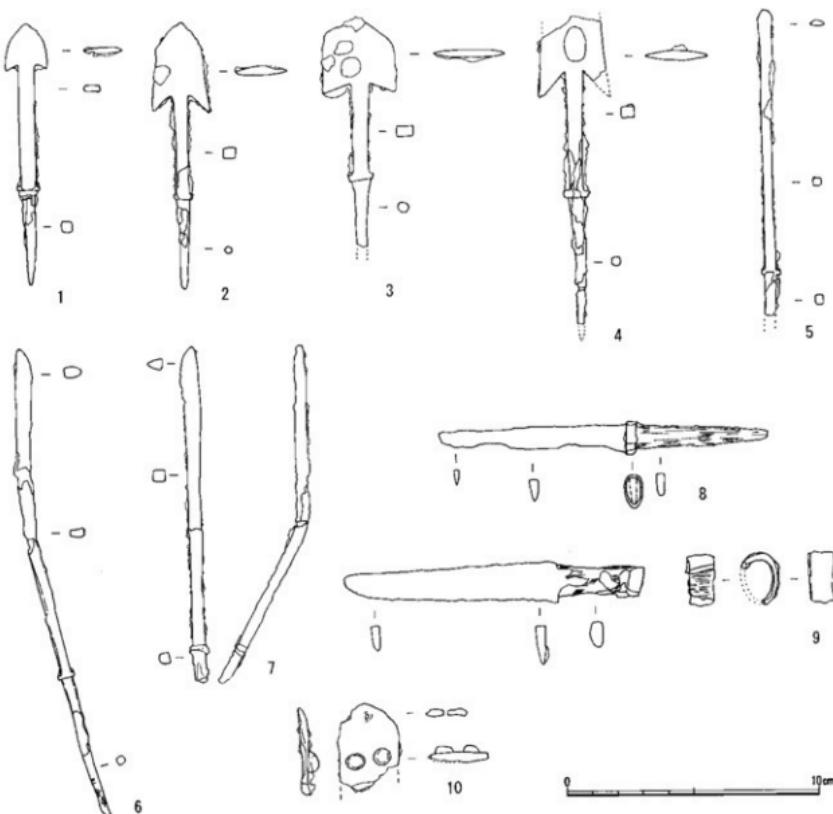
写真3 横穴式石室全景（閉塞除去）

るもの、全体としては玄室内の遺物はかなり擾乱を受けていると考えられ、副葬時のままの姿とは言い難い。また、前底部の中央、床面から20



写真4 横穴式石室全景（奥壁側から）

cm程浮いた部分には須恵器の長頸瓶が置かれていた。墓前祭祀の一端と考えられる。この他、石室上層、周辺からは須恵器の壺の破片、土師器の壺



第3図 横穴式石室の主な出土遺物 ( $S=1/2$ )

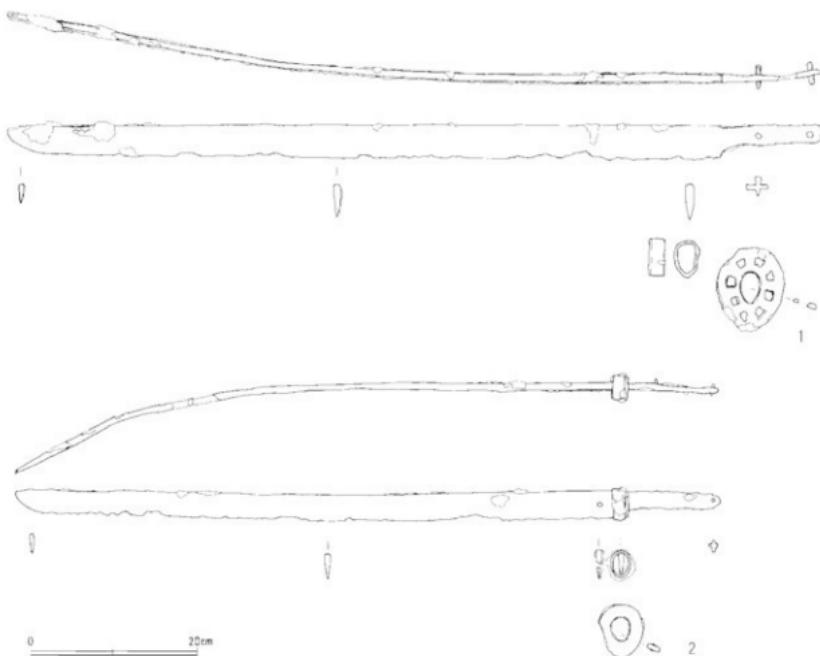
の破片が出土している。

調査の契機となった二振りの直刀は長さ 98 cm と 86 cm で、前者には八窓の鐔が、後者には無窓の鐔が伴う(第4図)。いずれも身幅が広く、厚い刀身である。双方とも、鐔とはばき部分に象嵌が認められる。八窓の鐔には小さな円を配した模様が描かれ、無窓の鐔にはより繊細な線でハート形の模様が組み合わされている(写真5・6)。神奈川県内で刀装具に象嵌を有する大刀は過去に十数例が知られているが、同様のモチーフはそれぞれ小

田原市久野2号墳、秦野市桜土手25号墳にみると  
ことができる。

#### 4.まとめ

日向・洗水遺跡の横穴式石室の年代については今後の検討によらざるを得ないが、直刀からは概ね6世紀代後半一末の時期が推定される。ただし、数種類が混在する鐵鏃には新しい要素もうかがえることから、恐らく7世紀に至っても追葬が行われていたと推定される。



第3図 横穴式石室の主な出土遺物 (S-1/6)

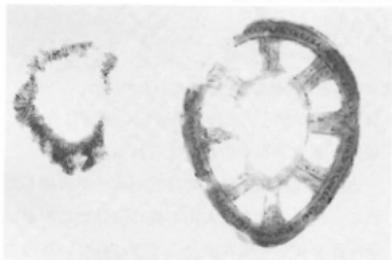


写真5 鏡のX線写真

石室自体は、とりわけ大きいわけではないが、使用している石の大きさや控え積みの幅などには当地域に一般的な石室の規模を越えるものがある。また、付近に点在している奥壁や天井石として使用されたと考えられる2mを越す石をみても、留

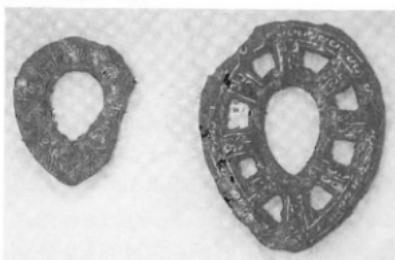


写真6 銅鏡象眼を施した鏡

主に次ぐクラスの石室と評価できるだろう。また、出土した直刀には銀象嵌が施されており、金銀の飾り大刀とはいかないまでも、それなりの地位を表す副葬品と評価できる。

神奈川県内で飾り大刀や馬具、銅鏡といった当

時の最高権力者に供えられる副葬品の分布を調べると、その多くが伊勢原市内に集中していることがわかる。相模国造の墓とも言われる三ノ宮地区の登尾山古墳、<sup>とおやま</sup>ならぬ古墳を筆頭に、他地域にはみられない特殊なあり方を示している。

日向地区でも、渋田遺跡で金銅製の刀装具をもつ大刀が出土しており、洗水古墳の銀象嵌の大刀もそうしたステータスシンボルのひとつと考えられる。こうした数々の副葬品からも、当時の社会にとっての当地域の重要性が知れるところである。

また、伊勢原市内では、日向や上粕屋、三ノ宮といった山裾の地域に多くの古墳が分布してい

る。洗水遺跡の近隣では、南側の鐘塚古墳の周囲、新田から三畠塚古墳にかけてに 20 数基の古墳を確認することができる（第5図）。さらに、日向・西新田原遺跡では、真っ平らな畑の下から石室が発見されており、既に墳丘が消失していく地中に石室だけが残されている例も多いと考えられる。昭和初期の資料によれば、市内には 500 基もの古墳が分布していたと言われているが、それも全く根拠のない割り話と言いつ切ることはできないだろう。そして、これに横穴墓の分布を加えれば、この周辺が一大墳墓群であったことは



第5図 日向・洗水遺跡と日向地区的古墳分布(1/10,000)

疑う余地が無く、それはより広い範囲に分布する集落と関係するものと考えられる。

古墳時代後期、飛鳥では聖德太子が活躍した時代に、相模では雲峰大山の麓に開けたこの地が、支配者を葬る神聖な場として選ばれていたのである。古墳、横穴墓、そしてそれらの母体となる集落がどのような関係を有して地域を形作っていたのか、今後に託された課題は大きい。

（紙面の関係で、引用・参考文献は割愛させた  
ていただきました）

## 相模原市 津久井城跡(馬込地区)

## —旧石器時代の石器製作跡—

はたなか としあき  
島中 俊明

所在地 相模原市城山町小倉字馬込135-1外

調査機関 (財)かながわ考古学財団

調査担当 島中俊明・栗原伸好・柏木善治・  
富永樹之・加藤勝仁・伊東甚吉・  
吉田政行・渡辺 外・宗像義輝・  
瀧谷正信・天野賢一・三ツ橋勝・  
市川正史調査原因 津久井広域道路整備事業に伴  
う事前調査

調査期間 2006年2月1日～2007年10月15日

調査面積 16,940 m<sup>2</sup> (対象面積)

第1図 調査位置図(1/10,000)

## 1. 遺跡の立地

津久井城は、相模原市城山町と津久井町の境に所在する城山を利用した戦国期の山城である。標高375mの山頂には本城曲輪が築かれ、調査地点は、そこから東に1km程下った場所に存在する。遺跡の東側約150mには串川が流れ、深い谷が刻まれており、谷を挟んだ対岸には、さがみ縦貫道路建設に伴い(財)かながわ考古学財団で発掘中の小保戸遺跡が所在する。また、本遺跡の北東約1.4kmには、縄文時代の敷石が出土し国指定史跡となった川尻石器時代遺跡が存在する。1990年に県道建設に伴い神奈川県立埋蔵文化財センターにより調査された川尻遺跡では、B1層上部(IV文化層)から8ブロック、B2層(第V文化層)から6ブロックの石器集中を伴う、旧石器時代の石器群が発見されている。

今回調査した城山町小倉字馬込地区一帯は、津久井城に関連すると思われる、「家臣屋敷」や「馬

場」の伝承地が存在する。遺跡の北西側には沢が流れ、急傾斜となっている。同様に東側も串川に向かい急斜面が形成されている。標高は約130～160mを測り、旧石器時代の石器は概ね150m前後の台地上から出土した。

## 2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、神奈川県津久井土木事務所(以下、津久井土木)による津久井広域道路整備事業に伴う事前の発掘調査である。工事に先立ち、平成17年度に神奈川県教育委員会生涯学習文化財課が2度にわたって実施した試掘調査の結果、当該地域一帯が津久井城の一部を成すと考えられることから、平成18年2月より(財)かながわ考古学財団によって発掘調査が実施されることとなつた。平成18年度はA～C区の約11,000 m<sup>2</sup>、平成19年度はD区約5,500 m<sup>2</sup>とA・B区の旧石器時代



第2図 旧石器調査配置図(1/2000)

約850 m<sup>2</sup>を調査した。

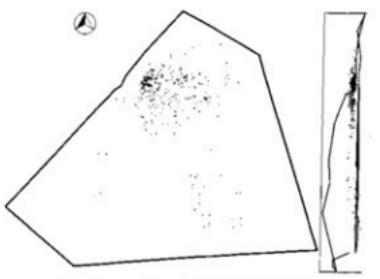
### 3. 調査の概要

旧石器時代の調査は、基本的に2×2 mの試掘グリッドを設定し、安全基準の約2 mの深さまで掘り下げ、石器群の有無を確認した。石器が発見された試掘グリッドでは、石器が出土した高さ(同一層位)で平面的に拡張する方法にて調査した。試掘グリッドは、地形等によっても左

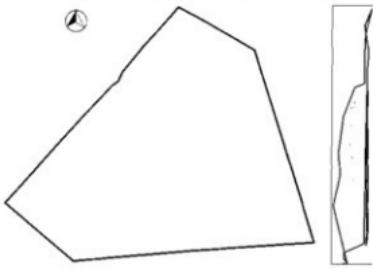
右されるが、急傾斜地以外の平坦面ではほぼ均等に、A区の埋没谷の周りはやや密に設定した。尚C区は、沢からの砂礫層が厚く堆積し、その上調査区が狭小であったため、ローム層の調査は出来なかった。

A区の調査は、北から東の急斜面地と南側の埋没谷を除いた平場を中心試掘を行った。A区の

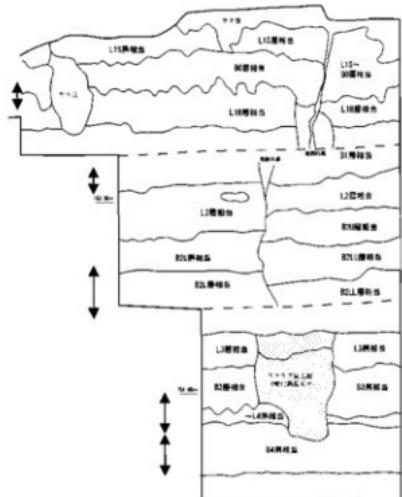
北西M・N・O-26・27 グリッド付近では、中世戦国期に曲輪を造成する際ローム層の上部を削平しており、L1H～B1 層上部付近のおよそ 1～1.5m の深さまでが削られていた。その結果ここでは、最初の試掘で B2 層相当の深度まで調査することが可能であり、礫群を伴う 100 点余りの石器群を発見することができた。因みに B4 層に到達するまでは、削平されたローム層の上面からでもおよそ 3m の深さがあり、1 回の試掘調査では AT 層下位までも到達できなかった。B2 層相当の石器群を面的に調査した後、層位を確認する目的で深掘りをかけたところ、B3～B4 層相当にて石器群が発見された。B3 層～B4 層相当石器群の明確な分離については、今後の分析が必要となるが、B4 層相当から出土している最下層の石器群は、概ね径 30m 程の環状に分布する傾向が見られた。その他 P-23・24 グリッド付近では、B1 層相当下部から斧形石器や削器・剥片等が出土している。



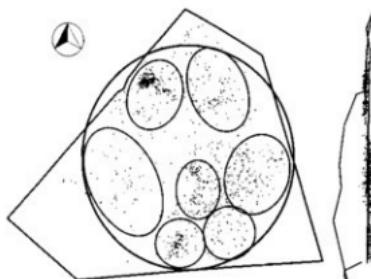
第4図 A区 B2層相当石器分布状況



第5図 A区 B3層相当?石器分布状況



第3図 D区ローム層断面図



第6図 A区 B4層相当石器分布状況

埋没谷を挟んだ南側の B 区では、O-18・19 グリッド付近と、Q-18 グリッドにて石器が出土している。ローム層の上位に位置する B0 層相当から黒曜石を主体とする石器群が発見された。

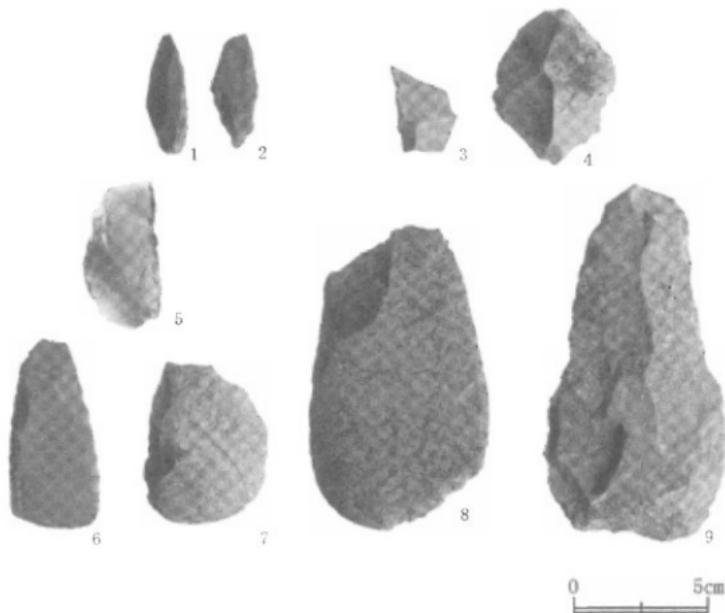
また、Q-18 グリッド付近の調査区では、近世以降の段切りによって大きく削平された B3～B4 層相当のローム層中から 22 点の石器が発見された。その他、D 区の南端でも深い谷の落ち際の 2カ所において、B0 層～LIII 層相当から単独ではあるが、礫器や剥片が出土した。D 区では、ローム層の残りがよく、ローム層の上面から B4 層相当までは、4.5～5 m の深さがあった。

#### 4.まとめ

今回の調査では、これまで旧石器時代遺跡の空白域であった県北の相模川右岸地域において B0 層相当～B4 層相当まで、粗密の差はあるものの重

層的に石器群の存在を確認できた。また、A T 下位においては質・量とも良好な石器群を発見することが出来た。さらに A 区の B4 層相当の石器群においては、おそらく県内で初となる環状ブロック群の様相を呈しており、複数の石斧が出土している。今後整理作業を通じて、石器群の全容を明らかにしたい。

末筆にて恐縮ですが、津久井城跡の発掘に際し、ご意見・ご教示頂いた方々に感謝いたします。また、編集にてお世話になった神奈川県考古学会吉田政行氏にお詫びするとともにお礼申し上げます。



第7図 出土石器 [1・2ナイフ形石器(=B3層相当?)、3切出形石器、4円形搔器(=B2層相当)  
5台形様石器、6斧状?石器、7・8局部磨製石斧、9打製石斧(=B4層相当)]

## 秦野市 太岳院遺跡

—縄文時代後期・晩期の墓域と集落—

おうみや しげはる  
近江屋 成陽

所在地 秦野市今泉391番

調査機関 (有)山武考古学研究所

調査担当 近江屋成陽

調査原因 太岳院本堂新築工事に伴う事前調査

調査期間 2006年5月22日～8月31日

調査面積 1,089 m<sup>2</sup>

## 1. 遺跡の立地

太岳院遺跡は秦野盆地の南東部に所在し、室川左岸の標高約100mの微高地にある縄文中期～晩期・古代～近世の遺跡で、微高地の先端にある曹洞宗寺院「太岳院」の境内を中心に広がっている。秦野市No.001 太岳院遺跡として登録されており、区画整理事業に伴い1987年から1997年まで発掘調査が行われている。縄文中期～後・晩期の集落跡及び古代の集落跡が発見されたほか、市域では初めて旧石器時代の遺物が確認された。

## 2. 調査に至る経緯

今回の調査は本堂新築工事に伴い、太岳院の委託を受け、秦野市教育委員会の指導のもと、有限会社山武考古学研究所が行った。

## 3. 調査の概要

調査区内は太岳院の境内であったため、部分的に破壊は受けているものの遺構の保存状態は比較的良好であった。

## (1) 縄文時代

中期から晩期にかけての堅穴住居跡、土坑、ピット、配石遺構が多く発見された。



第1図 遺跡位置図 (1/10,000)

## ①中期

堅穴住居跡9軒、集石3基、屋外埋設土器3基、土坑76基、ピット多数が調査区の全域にわたり発見された。遺物は加曾利E式期を主体とし、勝坂式期と曾利式期の出土が若干みられた。

## ②配石遺構・配石墓

今回の調査で特に注目されるもので、調査区の南西側から東側にかけて弧を描くように配石遺構が発見された。配石遺構は古代以降の遺構に破壊されているものが多いが、立石状の石を伴うものが6基発見された。遺物は遺構周辺から多量の土器片や土偶、石鎌、打製石斧、石棒、石皿が出土した。配石遺構の真下やその周辺の下部から配石墓が発見された。

配石墓は全部で32基確認された。そのうち4基からは、人骨が発見された。さらにうち1基からは深鉢形土器が頭部の上に置かれた状態で出土した。このほか、配石墓から出土した遺物には、後期後半の加曾利B式期所産の浅鉢形土器、磨製石斧、翡翠製の勾玉及び小玉があつた。

### ③後期の住居跡

後期の住居跡は調査区の東寄りの場所で2軒が発見された。北側のものは柄鏡形敷石住居跡で方形に小礫が巡り、溝が掘られていた。床面は火熱により焼けて硬質化している。炉は石開炉で炉内には焼けた痕跡がない。入口部と考えられる張り出し部に扁平な石が敷かれていた。出土遺物は加曾利B式期の深鉢形土器、石皿等が出土した。

### ④晚期の住居跡

晚期の住居跡は調査区北東側に1軒発見された。この時期の住居跡の発見例は市域では初めてである。住居跡の覆土中からは獸骨や上鱗片がまとまって出土した。また床面に近い所からは石棒や木菟土偶が出土した。設置された炉は石開炉で住居のほぼ中央部から発見された。火熱により炉内が赤色化していた。

#### (2) 古代・近世

古代の遺構は堅穴住居跡6軒、掘立柱建物跡3棟、小ピット33基が調査区のほぼ全域から発見さ

れた。堅穴住居跡は調査区の北東部と南西部に集中している。カマドの位置は北側、北西側、西側にそれぞれ附設されている。出土遺物は8世紀前半の土師器甕、壺、須恵器壺が出土した。掘立柱建物跡は調査区の南東側に集中し発見された。桁行き、梁行き共に2間で、うち1棟は溝ものの建物であった。近世の遺構は調査区の南西側に方形の土坑1基があった。遺物は瓦灯、陶器甕であった。太岳院に関係する遺構の可能性が推測される。

### 4.まとめ

今回の調査では縄文時代中期～晚期、古代・近世の遺構・遺物が発見された。特に注目されるのは縄文時代後・晚期の墓域が明らかになったことである。現在、報告書刊行に向けて整理作業を進めているが、配石墓の主軸方位、形態、遺物の出土状況、上部配石遺構との分類・時期等を分析し、集落との関係を少しでも解明したいと思っている。



写真1 配石遺構発掘風景

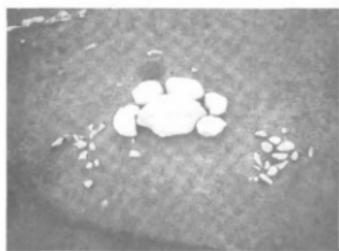


写真2 8号配石遺構



写真6 13号配石墓



写真3 19号配石遺構



写真7 24号配石墓



写真4 34号配石遺構



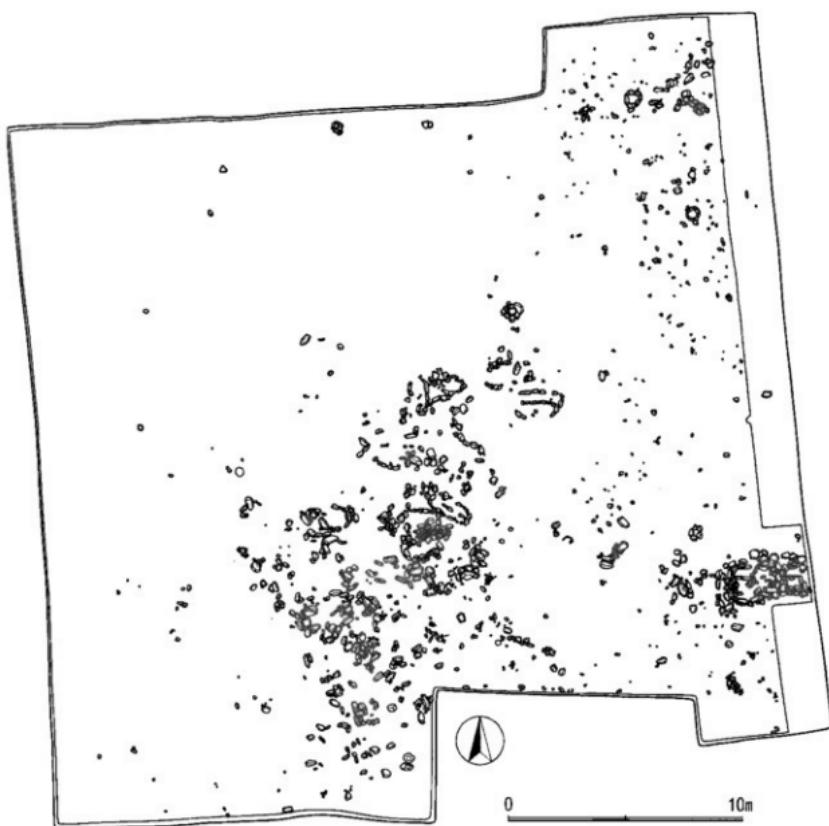
写真8 34号配石墓人骨検出状況



写真5 12号配石遺構



写真9 44号配石墓人骨検出状況



第2図 配石遺構配置図



第3図 配石基配置図

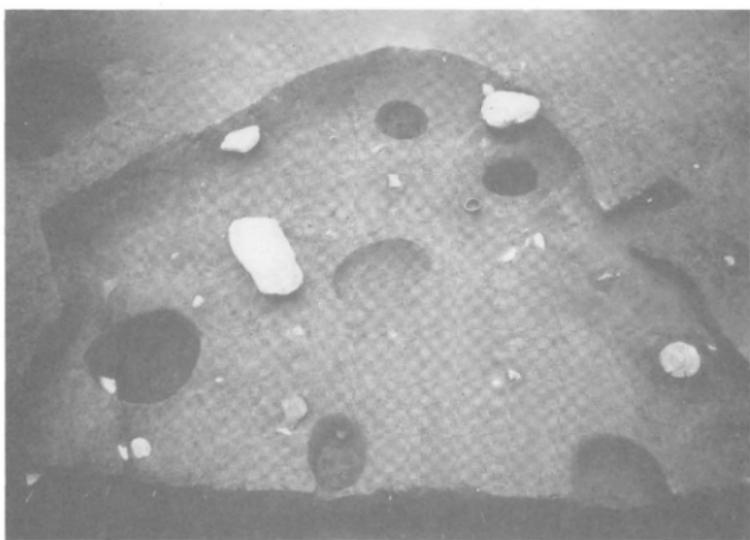


写真10 縄文後期堅穴住居跡

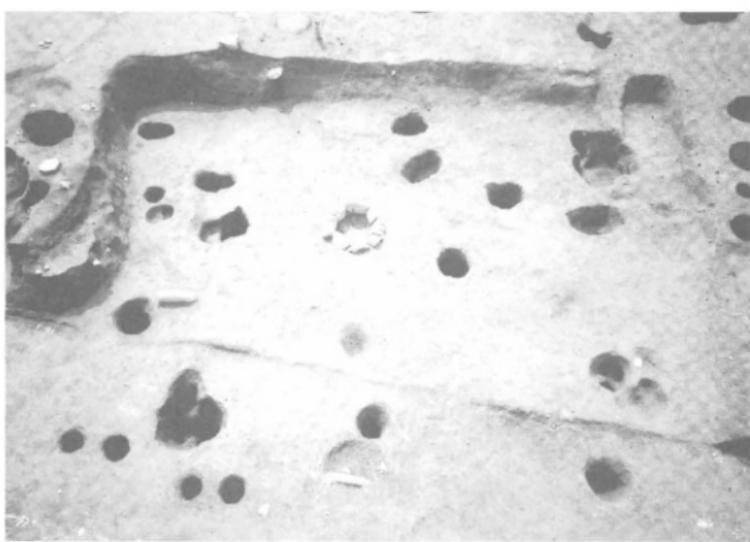


写真11 縄文晚期堅穴住居跡

かわらぐちばうじゅう  
海老名市 河原口坊中遺跡（相模川河川改修事業）

—相模川自然堤防上の弥生時代の集落—

みやい かおり  
宮井 香

**所 在 地** 海老名市河原口158-2番地他

**調査機関** 財団法人かながわ考古学財団

**調査担当** 宮井 香・後藤喜八郎

**調査原因** 相模川河川改修事業・さがみグリーンライン（自転車道整備）事業に伴う発掘調査

**調査期間** 平成 18 年 11 月 17 日～平成 19 年 2 月 28 日

**調査面積** 364 m<sup>2</sup>

### 1. 遺跡の立地

本遺跡は、海老名市西部、JR 相模線・小田急小田原線の厚木駅の北西約 1 km に位置し、地形的には市域の西縁を南流する相模川中流域左岸に展開する、標高約 21~22m の相模川の自然堤防（沖積微高地）に立地する。河原口坊中遺跡は、海老名市No.52 遺跡として神奈川県遺跡分布図および埋蔵文化財遺跡台帳に登録されている。遺跡の性格は、弥生時代から近世の遺物散布地・集落跡として周知されている。今回の調査地点は、河原口坊中遺跡の西側の一角にあたり、調査地点の現標高は約 21.3~21.7m を測る。

### 2. 調査に至る経緯と調査経過

本調査は神奈川県相模川総合整備事務所による、相模川河川改修事業・さがみグリーンライン（自転車道整備）事業に伴う事前の発掘調査である。このため、神奈川県相模川総合整備事務所の委託を受け、財団法人かながわ考古学財団が 2006 年 11 月 16 日より 3.5 ヶ月間調査を行った。また 2007 年



第 1 図 遺跡位置図

8月 16 日より 6 ヶ月の予定で、昨年度の調査地区的北側隣接地を現在調査中である。

### 3. 調査概要

平成 18 年度の調査では、近世、中世、奈良・平安時代、弥生時代の遺構・遺物が発見された。本調査地点は、表土層直下から弥生～古墳時代の遺構確認面までは河川の氾濫等により、二次的な堆積をした土層が遺構確認面となり、包含する遺物も弥生時代から近世に比定されるものが混在していることから、遺構の覆土は氾濫の土砂と一緒に流された可能性が考えられる。このため奈良・平安時代から中世の遺構は覆土が地山（包含層）に類似しているため検出が困難であり、遺構確認面より下層で確認されるものも多かった。また、弥生時代の遺構の覆土も一部、包含層（河川の氾濫等により堆積した砂質土層）に非常に近似しているた

め、遺構平面プランの確認はたいへん困難を極め、調査の進行には時間を要した。

**近世** 壓穴状遺構1基、溝状遺構3条、井戸1基、土坑4基を検出した。

壓穴状遺構は、一部を調査区北側に展開するため全容は不明であるが、検出部分での規模は東西5.5m・南北3.5m・深さ0.2mを測る。

溝状遺構は、第1・2号とも相模川に直行する東西方向に走行し、それぞれ調査区外に展開する。このうち第2号溝状遺構の規模は、上端幅4.5m・下端幅0.3m・深さ1.6mを測る。土層断面の観察、また覆土中から中世の縁軸陶器破片が出土していることから、長期間におよぶ使用、数度の掘り直しがあったと推定される。

**中世** 挖立柱建物址1基、柵列1条、井戸1基、土坑4基、ピット33基を検出した。

掘立柱建物址は、西側を調査区外に展開するため、全容は不明であるが、現状では桁行2間×梁行1間以上の総柱式の掘立柱建物である。

**奈良・平安時代** 壓穴住居址1軒、壓穴状遺構3基、土坑5基、ピット24基を検出した。

壓穴住居址の規模は、長軸(東西)2.8m・短軸(南北)2.6m、深さ0.45mを測り、主軸方位はN-87°Eを示す。床面は硬織な貼り床が検出され、カマドはくり抜きの煙道部を持つ。

**弥生時代** 方形周溝墓2基、ピット列1条、壓穴住居址4軒、硬化面範囲6箇所(このうち炉址を伴うものが4箇所あり、住居址の可能性がある)、ピット41基を検出した。

1・2号方形周溝墓は、周溝を含めた全長が現存部で15m以上を測り、一部周溝を共有している。1号方形周溝は、南東部に陸橋を設けている。壓穴住居址は遺構の平面プランの確認において困難を極め、本調査地では床面の硬質部・炭化物の堆積の範囲と炉址から住居址の有無を確認できる状況であったため、調査の手順としては遺構名

を硬化面として個別に番号を付した。5・6・8(があり)・10号硬化面は、床面の硬化面の範囲から住居址の平面プランとして確認できた。1~4号硬化面は、床面の硬化面の広がりのみでは住居址として判断できなかったが、炉址を伴うことから住居址の可能性がある。7・9号硬化面は、一部しか床状の硬化面が確認できなかったが、前述の各硬化面と同様の様相から判断して住居址の可能性がある。

今回の調査で出土した小銅鐸は、4号硬化面の床を掘り込んだ四角いピット状の掘り込みから出土した。出土状況は、鉢を北東側に向け、側面を上下にして横たえた状態であった(具体的には島根県荒神谷遺跡の銅鐸出土状況と同じ)。重複関係は、3・4・5・6・8号硬化面と認められる。小銅鐸の時期は、周辺の出土遺物と遺構の先後関係から判断して弥生時代後期と判断したい。

#### 4.まとめ

今回の調査では近世、中世、奈良・平安時代、弥生時代と考えられる遺構・遺物が発見された。

近世の注目される遺構は、2号溝状遺構がある。その規模や使用状況において特徴がみられた。西側の相模川現堤防を突き抜けている状況は、堤防の測量の等高線から容易に判断でき、排水機能をもつものと考えられる。

中世の注目される遺構は、1号掘立柱建物址がある。西側現堤防に延びる規模により、桁行きが南北にあるか、東西にあるかが問題として残っている。このほか、近世の2号溝状遺構に削平され空白地となっているが、1号柵列との関係を留意する必要があろう。

奈良・平安時代の注目される遺構は、1号壓穴住居址がある。カマドは、くり抜き式の煙道を持ち、床面は堅い貼り床が数枚施されていた。遺構配置図の平面プランでは、確認できないが、G-36Gr

の壁面から堅穴住居址の断面が確認できることから、当該期の遺構分布は調査区全域に及ぶものと考える。

弥生時代の注目される遺構は、方形周溝墓と堅穴住居址がある。住居址は複雑に重複しているが、その時期は中期（宮ノ台）から後期にかけてのものが中心である。2号方形周溝墓の時期は、10号硬化面（宮ノ台）の住居址より新しい時期であることが土層断面より判明している。なお、1・2号方形周溝墓では、2号方形周溝墓の方が新しい。

最後に、今回の調査で最も貴重な成果は、小銅鐸の出土である。神奈川県内で3例、海老名市では海老名本郷遺跡に次いで2例目である。本遺跡以外の小銅鐸は、小銅鐸本来の意義（性格）をもつものではなくなりており、住居址や溝に廃棄さ

れ、破損した状態で出土している。しかし、本遺跡の小銅鐸は、ほぼ完全なものであること、鋳造時の型持ちがきれいに確認できること、床面に穿たれた穴から検出したこと、銅鐸の埋納の状況が鋳化して付着した覆土の状況から判明したこと等、大きな成果を得ることができた。

河原口坊中遺跡では、平成19年8月16日より6ヶ月の予定で調査が進行中であり、来年度以降も引き続き調査が行われる予定である。また、現調査地点に近接して平成18年6月より鎌中日本高速道路事業用地の調査も継続的に行われている。今後の調査成果、整理作業における正確な時期等の成果を踏まえ、小銅鐸が本遺跡で出土した意義を考察していくとともに、相模川の沖積低地における各時代の遺跡の様相が明らかになっていくことに期待したい。



第2図 弥生時代遺構配置図(1/400)

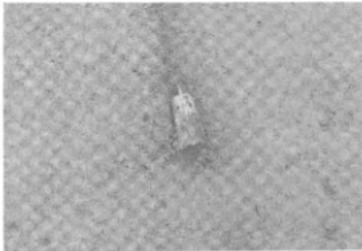


写真1 小銅鐸出土状況



写真2 第6号硬化面(住居)

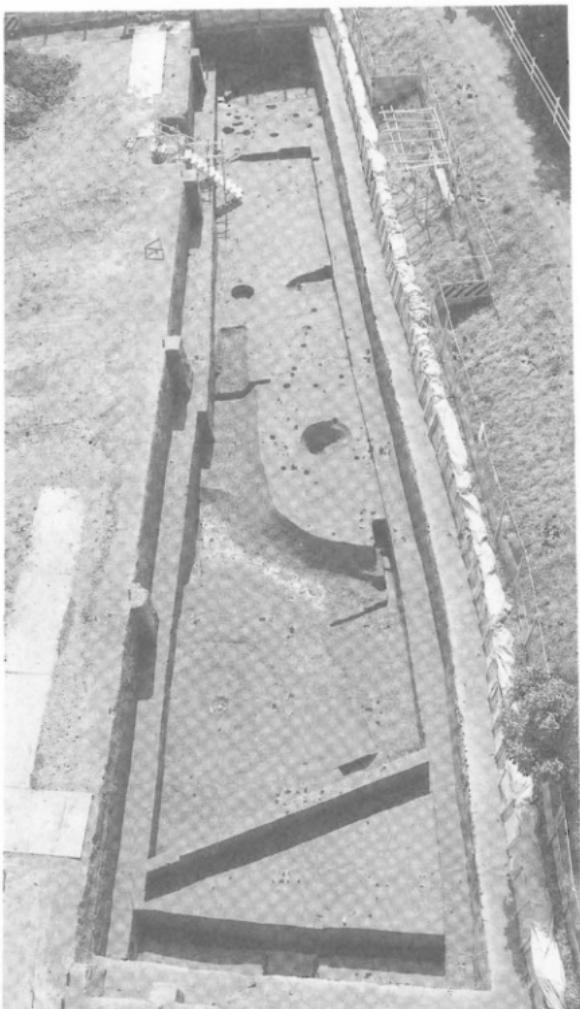


写真3 調査区全景〔弥生時代〕北から